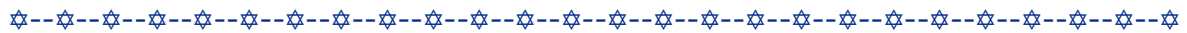




いまさら聞けないウクライナ戦争シリーズ #5
アラブ首脳会談とゼレンスキー大統領

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。

今日はエゼキエル戦争との関連について、少し考えたいと思います。

ゼレンスキー大統領はG7 広島サミットに来る直前、サウジアラビアに予告無しに行きました。サウジアラビアでいったい何があったのか。

5月19日にアラブ連盟首脳会議があったんです。

21のアラブの国と1つの地域が集まって、ホスト国はサウジアラビアです。

アラブ世界のトップがみな集まっているところで彼は演説したのですが、非常な名演説でした。

彼の演説はいつも名演説ですが、特にこの会議での演説は胸を打ちましたね。

「皆さんの中で、国の1/3が強奪されているのを、黙って見過ごすような人は誰もいないと思います。また、何万人もの子供たちが連れ去られ、その子供たちが祖国を憎むように教育されるのを、黙って見過ごすようなリーダーは、この中に一人もいないと思います。」

他にも色々な言葉が伝わっていましたが、みんな大拍手ですよ。

イスラエルの新聞を見ると、「凄い。ゼレンスキーはユダヤ人として初めて、すべてのアラブ首脳を前にして演説した。」

ゼレンスキーはユダヤ系ウクライナ人であるからこそ、そのように言ったんですね。

この会場には驚くべき人物も座っていました。シリアのアサド大統領です。

14年前からシリア国民を残酷な方法で虐殺し続けている。今に至ってもですよ。

彼は14年前にアラブ連盟から追放されました。

ところが、サウジアラビアはこのアサド大統領を招いたんですね。

アラブ連盟首脳会議とはどんな会議なのか。ウクライナ国民の代表として自由民主主義・人権を体現しているゼレンスキー大統領と、シリア国民を無差別大量殺戮し、化学兵器やサリンを常時使っているようなアサド大統領を、同じ会議・同じ場所に呼んでるんです。これほど対局の人物いませんよ。それを両方とも招いている。

実は、自由・人権・民主主義という価値観を最高の価値観として掲げている国はもはや少数派。ほとんどの国は実利重視。民主主義の国と付き合うために、民主主義を重視するようなポーズを取ることがあるけど、同時に、儲かるとなると虐殺を厭わない独裁者と平気で手を結びます。

どんなことがあっても民主主義・人権・自由を重んじていくことを少なくとも掲げようとしている国は、今や世界の少数派に転落し、パラレルワールドが姿を現しつつあるのではないかなと思いました。

さて、アラブの独裁者で私が思い浮かべるのは2人です。
イラクのサダム・フセインとリビアのカダフィ大佐。

サダム・フセインは地面の穴に隠れていたのを見つけ出され、穴熊が引っ張り出されるように引っ張り出されました。その時、米兵の通訳をしていた人はシリア派の亡命シリア人で、フセインは「この裏切者！」と、彼にペツと唾をかけたんですね。唾をかけられた通訳はサダム・フセインをボコボコに殴って。悲惨ですよ。そうして、2006年12月30日に絞首刑になりました。

リビアのカダフィは排水溝に隠れていたのを引きずり出され、裁判も受けさせてもらえず、そのまま民兵に処刑され、冷蔵庫に吊るされ、「コイツは本当に死んだ」ということを確認するために、その無残な死体を見ようと何百人も行列ですよ。

もうほんとにね、独裁者って、羽振りがいい時は泣く子も黙る存在ですが、その末路は実に哀れなのです。権力に任せて酷い事をやった者ほど酷い結末を迎えるという、まさに絵に描いたような終わり方で終わってしまうのが多い。多分アサドもそうだろうと思っていたら、なんと14年ぶりにアラブ連盟首脳会議に招かれて、主催者のサルマン皇太子にハグされているじゃないですか。

なぜアラブの首脳たちは、シリアのアサドを迎え入れたんでしょう。アサド政権の盤石さは、もうどんなに頑張っても、だれもひっくり返すことができないことが明らかになったからです。一時は風前のともしびだったシリアのアサドがなぜ息を吹き返し、シリアで絶対的権力を取り戻すことができたのか。

一にも二にもロシアの支援です。ロシアは地中海に自らの軍事拠点を設けるためにシリアを徹底的に援助し、そして、シリアの弾圧に手を貸したのです。大規模空爆をやったのはロシアの空軍ですよ。同時に、地面ではイランです。イランの革命防衛隊をはじめとする様々な民兵組織がシリアの国軍と一体化して、シリアの反体制派を血祭りにあげて来たのです。

つまり、混乱のシリアを巡って分け前を分け合うために、ロシアとイランが密接な繋がりを持つようになった。これが、この14年ほどの間に起こっていることなんですよ。

この様子が聖書に預言されているとしたらどうでしょう。
エゼキエル書 38章、今から2700年ほど前に書かれた旧約聖書の預言書の中に、ロシアとイランが密接な関係を持ち、やがてイスラエルに攻め込んで来るという預言が書いてあるんです。

エゼキエル書 38章

1 次のような主のことばが私にあった。

2 「人の子よ。メシエクとトバルの大首長である、マゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言せよ。」

マゴグは現ロシアです。なぜ、そうだと断できるのか。

フラウィス・ヨセフスは1世紀から2世紀に活躍した古代ユダヤの歴史家で、『ユダヤ古代誌』を書きました。これは聖書を勉強する人は必携の書物で、ちくま学芸文庫から出版され、日本語で読むことができます。

その中に、マゴグはどこかについて解説があるんですね。第1巻に出て来ます。それによると、カスピ海と黒海の間にある地域、2つの大きな湖に挟まれている地域から北一帯のエリアがマゴグと言われています。現在ここはカフカース、昔はコーカサスと言ったんですけど、そこから北は全部北極までロシア。マゴグはロシアです。

マゴグの地のゴグはロシアの指導者。ただし、ゴグは名前ではなくタイトルです。色んな政治的タイトルがありますよね。大統領・書記長・統領・首領様など。ゴグはそのようなタイトルです。終末時代のロシアは、どうも1人の人物の意向で動くようになってきているということ、ここで示唆しているように思います。

このゴグがやがてイスラエルに入る時、単独行動ではなく、いくつかの連合国を率いてやって来るんですね。

5 ペルシアとクシュとプテも彼らとともにいて、みな盾を持ち、かぶとを着けている。

マゴグと一緒にいる国の筆頭に挙げられているのはペルシア。イランですよ。イランの言語はペルシア語。ペルシア民族です。マゴグ（ロシア）とペルシア（イラン）は同盟関係を結んでいます。それはシリアにおいて、実際に機能しているんですね。

では、シリアは何でしょう。イスラエルが北から攻め込まれる時に、必ず通過することになる出入り口です。聖書は“北からロシア・イラン・トルコがイスラエルに攻め込んで来る”と語っていますが、ロシアとイランの関係、そしてシリアの関係、これは既にロシアとのトライアングルで、同盟関係になっていると言えるでしょう。つまり、**エゼキエル書**のパズルの一部が、今目の前で起こっているのです。

私たちは**エゼキエル書**の預言が実現する前に生きていますが、はるか前というよりも、非常に近い時代／終末時代に生かされていると言えるのではないのでしょうか。これらの詳しい解説はアメリカで話したいと思いますので、ぜひお聞きください。ごうちゃんねるでも追って解説しますので、またお付き合いください。

チャンネル登録もお願いします。ではまた ごうちゃんねるでお会いしましょう。皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！